

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 27

学校名・団体名	横浜市立大岡小学校
HPアドレス	http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/ohoka
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	自ら学びを創り、生き方を豊かにする子どもの育成
<p>〈活動・研究の意義、目的</p> <p>以下の三つの姿に焦点をあて「自ら学びを創り、生き方を豊かにする子ども」の育成を行う。</p> <p>ア 「やりたいこと」や「願い」を生み出す子どもの姿</p> <p>イ 新たな気づきや考えを生み出す子どもの姿</p> <p>ウ 本質に迫る活動を生み出す子どもの姿</p>	

平成 29 年度 6 年 3 組 「地域とつながろう はちブンブンプロジェクト」から見る、学校研究のまとめ

1. はじめに

本校は総合的な学習の時間を中心としたカリキュラムマネジメントを、各学級ごとに行っている。どの学級においても、地域とのかかわりを大切にし、子どもの願いや目的にあわせた必要感のある活動を実現している。今年度も、各学級において「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習活動が多く見られた。

本活動報告では、6 年 3 組の実践を取り上げて報告する。本学級では、1 年間、「ミツバチ」を材に学習を進めた。探究課題に、「ミツバチそのものの生態や生命のつながりと、それを活用した地域の人、まち、環境をつなぐプロジェクトの実現や、実社会でプロジェクトに取り組む人々の考え方」を設定し活動した。

1 年間の活動の中でも、以下のような記述からこの研究の成果を感じているので、先に引用したい。

「初めて大岡産のはちみつを味わったときに、地域の花のことを知りたくなりました。調べると、自分が思っていたよりも、大岡の町には自然や花が多くあることに気付きました。1kg のみつをつくるために、約 4 万輪の花が必要だから、20 万輪もの花からはちみつを集めてきたことを知り、驚きました。」

「わたしは、ハチのことも学んだけれど、O さんの考えも学ぶことができました。わたしたちのために、毎週、学校に来てくださり、内検やアドバイスをしてくださいました。養蜂の専門家ではなく、まちづくりの専門家だと知り、仕事以外の時間をつかって、いろいろな人のつながりを目指している人がいるんだということを知ることができました。」

「ハチミツイベントで、地域の人と地域の人が知り合いになっているのを見たときに、とてもうれしくなりました。」

これらは、子どもたちが書いた振り返りの一部である。教師が事前に子どもたちに形成を期待していた概念的な知識は以下のようなものであり、そこに迫るような子どもたちの文章であると考える。

『おもしろいことを通してまちづくりをしよう』という思いで取り組む人がいることや、地域には多様な環境があり、それらがつながり合って生きていたり、様々な条件で変化していたりすることに気付く。

こういった学びの中で、今年度の研究内容である三つの子どもの姿と、そのためにどのような手立が効果的だったのかを分析していきたい。

2. 「やりたいこと」や「願い」を生み出す子どもの姿

横浜のビルの屋上で養蜂活動が行われていることを知った子どもたちは、ミツバチを飼うことに関心をもった。「どんなものか、まず調べてみます。」「お母さんと相談してみます。」と、慎重な子どもたちの姿があった。土日をかけて調べたり相談したりしたことを持ち寄ると、「地域の人に感謝をしたいという願いにつながりそうだ」「単純に恐そうだけれど、面白そう。やってみたい。」と声が上がった。「でも、許可などはいらないのか?」「学校のみんなにも伝えておいた方がよい。」と、「まず飼ってみる」のではなく、「飼うための準備をする」ということになった。そこで、ミツバチを飼育するまでを一つのゴールとして共有することにした。すると、自ら行動を起こす子どもたちが表れ始め、その輪が広がっていった。「放課後、自分は動けるからやるよ」と言って自主的に地域や町内会長さんのご自宅をまわり、協力を求める子どももいた。また、「地域の材木店に木材をいただく話を付けてきました。今日、取りに行きたいです。」という子どももいた。「飼育開始」に向けて、それぞれが自分の得意なことを生かして取り組もうという雰囲気が生まれ、協働する子どもたちの姿が見られた。



この期間、教師は、とにかく専門家の方から情報収集を行っていた。どうしても子どもの力ではできないこと（ハチを移動させてくる）や、膨大な費用についての問題をクリアするために、用具を借りられないかということ事前に相談し、その後子どもが連絡をとって承諾をもらうための事前の話を通すことに終始した。その結果、試行錯誤しながらも、専門家と直接相談しながら、必要な準備を整えてゆく子どもを、見守ることができた。つまり、次のようなことが手立として有効であることが分かってきた。

- ①子どもたち自身が夢をもち、活動の目的を共有したり、それを実現するためのいくつかの目標をもったりすることができる時間を設定すること。
- ②特に単元のスタート時には、子どもの主体的な活動を保証できるよう、十分な教材研究をしておくこと。

3. 新たな気付きや考えを生み出す子どもの姿

夏が明ける頃、教師は、ミツバチを通して地域の環境を見つめ直すことができるような活動を期待していた。



そのためには、子どもたちから「どこから蜜を集めているんだろう。」という疑問が上がるが必要であると感じていた。ミツバチが空に飛び立ったときに「どこかに飛んでいくな。」と声をかけても、体いっぱい花粉を付けて帰ってくるミツバチをお世話していても、蜜源に関心を抱く子どもたちの様子を見ることができなかった。しかし、ほぼ全員が、この疑問を抱くことになった瞬間があった。



それは、「実際に自分たちで採った蜂蜜を口にした瞬間」である。味わったときに「ミツバチは地域のどこから蜜をもってきているのか。」と多くの子どもたちが口にした。この問いから、地域の蜜源調査に出かけた。

花を育てている民家へインタビューなども行い「ミツバチを庭で見かけたよ。」という声をいただくことで、実際にミツバチが、大岡の町で蜜を集めていることを実感していた。同時に、「確かに大岡のまちは、緑が多いまちではない。でも、思っていたよりも、たくさん花があったり、緑があったりしていることが分かった。」「帰り道でも、花に目が行くようになった。」と、まちの環境について気付きを新たに子どもたちの姿があった。

このような姿の実現が実現できたのは、次のような手立てが要因であったと考える。まず、無理に「蜜源を探しに行こうよ。」と言わなかったことが有効だったと考えている。無理やりやらされた活動では、子どもたちが、「何のために地域に出るのか。」という目的意識を十分にもてない可能性がある。教師が出なかったことが、結果的に、〈蜜を食べる→他の蜂蜜との味の違いを感じる→地域の蜜源が気になる→このまちにそんなに自然があるのかと自分の見方を疑う→実際に見に行こう！となる〉といった子どもにとって意味のある一連のプロセスの実現につながったのではないかと考えている。また、有効であったのは、蜜源マップである。子どもたちが持ち帰った情報を即時的に整理できるようなボードを作った。多種多様な植物や花が、人の手で育てられたり、管理されたりしていることを理解することにつながった。ここから見えてきたのは、次のような手立ての有用性である。

- ①一見遠回りであっても、子どもにとって意味のあるプロセスを作るために、子どもの関心をみとること。
- ②子どもが持ち寄った多様な情報を、目的に応じて整理する手立ては教師が十分に支援すること。

4. 本質に迫る活動を生み出す子どもの姿

「プレゼントするだけでよいと思っていたけれど、ただプレゼントするのは違う気がしてきた。」「Oさん（専門家）みたいに、地域の人同士や、地域と環境をつなげるということにもチャレンジしていきたい。」こういった子どもたちの願いを見とり、他の子どもに広げることで、「養蜂活動」を「養蜂を通したまちづくり活動」へと、その質を高めることができたと考えている。

この単元を設定する際、教師は、「なぜ都市部で養蜂が注目されているのか。」という問いを、教材研究で鍵になる問いとして抱いていた。そして、「養蜂、あるいはその副産物を活用して、地域や商店街の活性化を実現しようと努力している方々が、情報発信を行っているからである。」と結論付けていた。つまり、この単元の本質は、ミツバチや蜂蜜を通して、まちづくりに関わることであったと考えていた。このような価値ある活動に子どもの思いが向いていったのは次のような理由がある。

それは、今回、アドバイザーとして1年間を通して関わってくださったOさんの生き方や考え方に注目する子どもの存在である。ある女兒が「Oさんはどうしてこんなに、毎週来てくれるんだろう。本当は、違う仕事があるんだよ。」とみんなに投げかけた。Oさんは都市計画を仕事としている建築士であると同時に、養蜂を通して、地域の人々を面白いことをつなごうと、プロジェクトを立ち上げているという大変魅力的な方である。その女兒の発言をきっかけに、Oさんの仕事に対する考えを深く理解する時間を、子どもの必要感に基づいて設定することができた。「Oさんの目的と、ぼくたちの活動目的は、一緒なんだ。」と捉えられた1時間は、それまでの活動の積み重ねの上にあった気付きだと感じた。

- ①子どもたちが学ぼうとしていることが、実社会ではどのような価値があるのかを教師が分析しておくこと。
- ②地域社会で役割を担っている専門家や地域の方の生き方や考え方に触れる機会をもてるようにすること。

5. おわりに

三つの子どもの姿について述べてきた。どれにも共通するものとしては、「子どもの必要感に基づき、子どもにとって意味のあるプロセスを大切にする」ということである。単元はそこにあるものでも、与えられるものでもなく、子どもを見とりながら教師が創るものであるという考えに基づき研究を進めてきたことで、資質・能力を発揮し、主体的・対話的で深い学の実現に近づいていると思われる。

課題としては、すべての場面で子どもたちが学習に参加し、進んで思考している状態をつくっていくことである。特に、上記のような活動では、クラスとしてどうするか判断したり、決定したりする必要が多々あるが、そこでどのように全員が思考し、関与し、決定されていくかということを大切にしていきたい。